

【会議日時及び場所】

日時 2024年2月9日（金）15時～16時40分

場所 町田市庁舎 9階 農業委員会会長室（リモートによる実施）

（出席者）（敬称略）

■委員

岡司直也（委員長）、寺田徹（副委員長）、柏木千春、伊藤亨、坂本愛

■事務局

粕川担当部長、牛腸担当課長、喜多担当係長、田村担当係長、増田主任

■傍聴者

0人

【資料】

- ・ 次第
- ・ 資料1 小山田エリアにおける交流回遊拠点施設整備の進捗状況について
- ・ 資料2-1. 2 重点事業進捗状況確認シート
- ・ 資料3-1. 2 リーディングプロジェクト進捗状況確認シート

【議事要旨】

事務局から

2023年度の事業の進捗について

- ・ 小山田エリアにおける交流回遊拠点施設整備の進捗状況について
- ・ 重点事業の進捗について
- ・ リーディングプロジェクトの進捗について
- ・ 質疑応答及び意見交換

1 開会挨拶

- ・ 経済観光部北部・農政担当部長からあいさつ

2 委員会の目的・委員会の運営について

- ・ 事務局から説明
- ・ 委員会進行を岡司委員長へ引継ぎ

3 議事

1. 小山田エリアにおける交流回遊拠点施設整備の進捗状況について

事務局から資料1を基に説明

・ 委員

現在、交流回遊拠点施設の整備の進捗は、案の検討段階だと理解している。
 拠点施設は、実質的な里山の整備に繋がる施設となることが重要だと考えている。
 木材加工となると、どのような製品を作るか選択肢は多様だが、広葉樹の木材活用については既存のモデルが少なく、施設を運営することとなる事業者も苦慮するのではないかと。そこで、バイオマスの熱利用を検討してはどうだろうか。広葉樹をチップやペレットに加工し、拠点施設の暖房の燃料などに利用すれば、燃料の地産地消という考え方もできる。その場合、公共施設への導入事例は多くある。
 また、建物の規模が把握できれば、建物の需要量に対してチップやペレット(広葉樹)の必要量が算出できる。この施設があることでどの程度里山の整備が進むかが数値とし

て把握できる。

町田市は市で広葉樹林を多く所有しており、今後モデル事業として広葉樹林の整備を進めるという案を持っていると思うが、整備の際に発生するバイオマスの受け皿を市内に確保してもよいのではないかと。

整備を進めている拠点施設がその受け皿となれば、この施設を整備することが里山の維持に繋がるとわかりやすく提示できる。

現段階では意見として出すのは若干遅いとは思われるが、木材利用と比較してバイオマスの熱利用の方が、運営することとなる事業者がその事業性について判断しやすいのではないかと。

バイオマス発電となると施設規模が適正ではなく、導入コストも大きくなるため、チップボイラーなどの熱利用で拠点施設の冬の熱需要をカバーしたり、夏の場合は給湯に利用したりするなどが考えられる。

・ 事務局

確かに木材を製品に加工することは、ハードルが高いという意識はあった。木材の利用形態の候補の一つとして燃料への活用であれば、木材の需要を多く見込めるのではないかと考えている。

また、薪の需要もあると考えている。小野路や小山田エリアには薪ストーブを利用している方もいるので、その方たち向けの薪需要にこたえらるとか、木を切って薪をつくることから一緒にやるとか、なるべく木を使い切るというつもりで様々な使い方を検討していきたい。

・ 委員長

今回の内容は、地域のワークショップの結果から形をつくっているところがあるのではないかと。バイオマスとしての利用などのアイディアは出にくいところもあるだろう。そのような利用の可能性も含めて、間口を広くして検討してもよいと思う。

・ 委員

4つの機能を有する施設というところをみると「道の駅」と変わらない。里山環境の再生と活用という大きな視点で施設をつくる、「新しい里山づくり」を推進する施設という説明があったが、「新しい里山づくり」とは何をするのか。最終目標がどこか分かりづらい。新しい里山づくりの定義などについてももう少し説明をお願いしたい。

・ 事務局

かつての里山は、そこで暮らしている方が生活のために里山の資源を使うことで資源の循環が図られていたが、今は生活のためには不要なので資源が利用されず、循環が途切れている。

そこで、地域の方だけではなくエリア外の方や周辺市の方、企業・団体などいろいろな方々が里山の資源の活用を図り、循環させることが「新しい里山づくり」のイメージとしている。

新しい里山づくりを行うためには、人が集まってこないといけないと考え、交流回遊拠点施設として計画に位置付けた。

今回、施設整備にあたり議論を進める中で、施設の目的は人を集めることではなく、里山の環境を再生・活用するための拠点施設だろうということになった。

里山環境を再生し循環させていくには多くの人に来てもらう必要がある。そのための機能として木材の活用や、アクティビティなどの体験、休憩や飲食ができる施設が必要と考えている。

・ 委員

拠点施設にどういう人に集まってもらいたいのか。

この施設を新しい里山づくりに関わる人が集まる場所にしたいということだと思うが、観光寄りの施設にしてしまうと里山への関わり方が変わってしまう。新しいビジネスをしようとする人を集めたいのであれば、ワーキングスペースとか自由に話し合いができる場などが必要になるように思うが、どっちに進もうとしているのか。

・ 事務局

拠点施設は、観光的に「一元さん」で賑わうのではなく、リピーターになって何度も足を運んでもらうことをイメージしている。

アウトドアでも山側の活動をしている方、自転車であればロードもあるがマウンテンバイクの方とかが多く集まる施設にしたい。

そういう人たちに施設を利用させていただいて、里山の整備に関わってもらうところにつなげていくことを大事にしたい。

・ 委員

そういった考え方を明確にしていく必要がある。それによって、ヒアリングを行った事業者の捉え方も変わってくる。考え方を明確にして示すことができれば、参画を検討する事業者も出てくるのではないか。

・ 委員長

里山の関係人口をどのように増やしていくかという議論に重なってくる。

担い手を増やすというところにつなげていくために、間口は広くして、施設周辺で行われているアクティビティなどと連動していくことが必要になるだろう。重要なことなので引き続き検討してほしい。

・ 委員

施設の役割について、「地域住民の憩いの場となりちょっとした買い物ができる」、「来訪者の休憩の場となり、地域の賑わいを創出する」似ているようで相反する。

だれをどのように呼び込んで里山の再生に結びつけていくのか、ブランディングをしっかりとしないと中途半端になり、利益追求型の事業者しか入ってこないような気がする。利益追求型の事業者は利益が出ないと判断するとすぐに撤退してしまう。

確認したいのだが、建物の構造はどういうものを想定しているか。

・ 事務局

建物は「木造」を想定しており、できれば里山から発生する木材を使用したいと考えている。相原エリアには人工林もあるので可能であれば使いたい。

まちだの木材を多く使い、その次に多摩産材、国産材とできる限り近隣の木材を使用した施設を整備したい。

また、建物も一つに集約しなくてもいいのではないかという議論もある。ある程度の場所に分散して建物を整備しても良いのかなと考えている。

<ul style="list-style-type: none"> ・ 委員 	<p>建物を建てる時点で地域の里山の資源が使われるのであれば、効率性の問題など民間事業者がどういうものを求めているかというところをしっかりとつかんだほうが良い。</p> <p>また、地域の方々が求めている機能と外の人が求めている機能は違うと思う。ブランディングにつながる場所なので、そのあたりも把握して進めてほしい</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 委員 	<p>ずっと長くこのエリアに住んでいる人からはどのような意見があったのか。例えば、外から人が来ることに関してどう思っているのか。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 事務局 	<p>まず、ワークショップは、上小山田町・下小山田町にお住まいの方に町内会を通じて呼びかけを行い、手を挙げていただいた方にご参加いただいた。</p> <p>意見交換会は、ワークショップ参加者に声をかけて実施した。</p> <p>ワークショップ開催の当初は、このエリアに長く住んでいる方と比較的新しく引っ越してきた方との意見の違いというものがあった。里山を管理することの大変さや、里山の持っている価値などについて、お互いの発見があったのではないかと印象をもっている。</p> <p>意見交換会の「第2回」では、「里山の場の活用」というテーマで事業者を交えて実施したが、来訪者のマナーやモラルというところを心配している声が多かった。ただ、人が来ることで地域が賑わうことに関して否定するという感じではなく、お互いにとってよい関係をつくるためにどうしたらいいのだろうかということを事業者とともに考えることができたと思う。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 委員長 	<p>拠点施設整備に関して委員の共通したところとしては、この施設に誰に来てもらうのか、それに付随するコンセプトづくりというところを引き続き検討してもらいたい。</p>

2. 重点事業の進捗について

事務局から資料2-2を基に説明

<ul style="list-style-type: none"> ・ 委員 	<p>メンマ事業の採算面について、町田産メンマの事業化の検討について関わったが、参加した事業者は飲食店などのエンドユーザーであったことから、価格のところで検討がとまってしまった印象を持っている。</p> <p>そこで、メンマづくりのワークショップに参加した人たちで、事業化について検討する場を設けてはどうだろうか。事業の価値を理解している人たちで検討することで、コストを抑える工夫や価値を高めるアイデアが出るのではないかな。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 事務局 	<p>メンマづくりワークショップは、地域の団体において実施した。</p> <p>参加枠を拡大するなどかなり人気のある事業だった。参加者は、30代や40代の方が多く「メンマづくりが楽しい」、「新しい発見があった」というご意見をいただいた。</p> <p>委員からお話があったが、メンマの事業化について、その価値がわかっている人に考えてもらうことは可能性があるかなと感じている。</p> <p>行政としてもバックアップできたらよいと思う。</p>

<ul style="list-style-type: none"> ・ 委員 	<p>メンマ事業の採算性に関して、今の状況では考えなくてもいいのではないかと。現時点では、「こんな面白いことができる」と示していくことが行政の関わり方だろう。</p> <p>単にメンマを売るのではなくて、メンマは「里山を保全することを支援するための商品」として対価を得るとか、体験プログラムとして対価を得ることをしながら、いろいろな人たちに関わりをもってもらい、次のステージで、ビジネスになると考える人を見つけてきて、その人たちがビジネスモデルを構築していくことになると思う。</p> <p>その様な人たちを見つけるために、メンマにまつわるストーリーを作り上げていくことが重要になる。メンマづくりに関わる人の思いだとか、里山の保全がなぜ必要なのか、その一つとしての「メンマづくり」ということを位置づけ、伝えていくことが今は重要なのではないかと。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 委員 	<p>拠点施設との関連で確認したい。小山田の森委員会によるイベント開催の報告があったが、この団体と拠点施設整備の検討とのかかわりはあるか</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 事務局 	<p>小山田の森委員会は、事務局を町田マウンテンバイク友の会の方々が担っているが、構成員として、町内会や街づくり団体の方も入っており、地域と一緒に活動している。小山田小学校もかかわっている。</p> <p>拠点施設のワークショップや意見交換会には、本委員会の構成員で地域にお住まいの方にもご参加いただいた。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 委員 	<p>拠点施設について、まだ整備そのものの方向性がはっきりしない中で、小山田の森委員会が地域で行っている活動は見過ごせないと思う。</p> <p>すでに実施されている活動を受け止める拠点として、地域の活動と外の人たちをつなげるほうがいい。このような団体の活動は、子育て世代や若い人をひきつける求心力があるのではないかと。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 委員 	<p>情報の発信について、今は少人数で実施し少しずつ広げていこうと考えているのかなと感じているが、もう少し外の人たちにも発信されてもいいのかなと思う。市広報を通じたPRも行われているが、広報だと年齢層が高めで市民の方が見るものになる。</p> <p>外への発信は、SNSが主流だと思う。一部の団体では一生懸命発信されているが、「まちだの里山」という視点で活動全体がみることができるといいのではないかと。</p> <p>単独の活動をピンポイントで観光協会として発信することがあるが、三輪や相原の活動の様子とかがわかるとよい。</p> <p>メンマづくりなどは、話題性あってテレビとかで取り上げられると一時的な反響があり、今まで里山を知らなかった人に届いて「知る」という点での効果はあるが一過性の部分もある。</p> <p>里山環境保全という視点でとらえれば、里山のページがあって少しずつでも更新され、地味けどすそ野が広がっていく。そういう発信があってもいいのかなと思う。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 事務局 	<p>メンマづくりの事業化に関して、新倉委員からご意見をいただいているのでご紹介し</p>

たい。

事業化に関して、竹林の管理に困っている農家の方が一定数いる。そこで、材料を一定の価格で買い取る仕組みがあれば、材料の調達に困ることはないのではないか。とのこと。

メンマを商品として考えた場合、事業化に前向きな方が来るのを様子見しつつ、声掛けも必要になってくると考える。

メンマづくりを行っている団体の活動に関しては、里山活動の仲間づくりを主眼に活動している。きっかけづくりとしてメンマづくりのワークショップがある。体験料は必要な資機材の購入などに充てられており、収支はトントンというところ。

情報発信に関して、まちだの里山のトータル的な発信に関してできていないと感じている。昨年の委員会でも「まちだの里山の将来の絵」についてもご意見もいただいているところだが、まだできていない。

1点目でご説明した拠点施設は、里山全体のあり方として構想を策定することになる。里山全体のあり方をまとめるためには、「一枚の絵」というものが必要になってくる。構想策定の中でぜひ作成したいと考えている。

その絵ができれば、その絵に絡めた情報発信をどうしていくか考えていきたい。

3. リーディングプロジェクトの進捗について

事務局から資料3-2を基に説明

・ 委員

リーディングプロジェクトに参加している人たちの世代は？

以前、「担い手の高齢化が進んでいて・・・」という話もあったが、例えば大学とかに参加を求めるようなことはしているか。

新しい里山をつくるのは若い人たちだと思う。10年後の里山を目指すのであれば、若い世代に声をかけているか。大学生はいろいろなアイデアをもっている人が多い。やっていないのであればぜひ声掛けをしてほしい。

・ 事務局

活動に参加している人たちの世代に関して、例えば、今年度は小山田や小野路エリアにおいて、クリーンアップキャンペーンを実施したが、町内会などを通じて声をかけた場合、参加者の多くは小学生低学年や未就学のファミリー世代と高齢の方々という印象。

大学生をはじめとする若い世代は少なく、この世代へのアプローチは課題と感じている。

・ 委員長

法政大学では学生が里山の保全活動に関わっていたりするので、大学へのアプローチの仕方によっては、なにかできるかもしれない。

4. 委員会全体を通じた確認事項及び助言

